

何も足さない言葉 武富純一

昨年十二月、京都で開催された現代歌人集会秋季大会、大辻隆弘の「佐藤佐太郎について」の基調講演が興味深かった。

大辻は「佐太郎の歌は音楽で言えばビートルズ」として、長年にわたり常に高い人気を保ち、初心者でも安心して読めて勉強になると、その世界を評価する。

そして「作歌の際、もう十分な内容なのにあと何音か足さねばならないとき、一番ダメなのは不用意な説明や想像を入れてしまうことで、そんなとき必要なのは、何も言わないクッション材のような意味の無い、でも調べのいい言葉だ」と述べ、佐太郎はそんな「何も足さない言葉」を数多く知っているとして、『佐藤佐太郎全歌集各句索引』（現代短歌社）から次のような言葉とその頻度を紹介した。

あらかじめ／13首、おしなべて／10首、おほよそに／23首、あるときは／33首、さながらに／20首、さまざまに／16首、たちまちに／32首、ひとしきり／21首。

たとえば「さながらに」は「…のよう、そのまま、ひたすら」の意だから大して強い意味はなく、つまり何も足さない言葉である。

・さながらに霜あれて軽き庭のつち寒の日々晴れて乾きに乾く

『冬木』

・風は夜を待たずといえばさながらに庭を覆いて雪やみにけり

『開冬』

全ては紹介しきれないが、他も同様だ。

・あるときは幼き者を手にいだし苗のごとしと謂ひてかなしむ

『形影』

・高原のうへの千草はおしなべてたけの短かさ風に吹かるる

『地表』

・ひとしきり乳色の窓かがやきてかたはらに愚かなる猫が居るのみ

『帰潮』

いずれもなるほど「何も足さない言葉」であり、それ故に極めて柔らかくマイルドに一首全体を機能させているのがわかる。

併せて「言葉をのろく使う」ことも大事だとして、他に「をりをりに」「おのずから」等の例歌も示し、「これを真似するだけであなたも佐太郎になれる！」と言い切つて会場の笑いを誘った。

概して現代短歌は機知に走りがちな傾向にある。それは決して悪い面と言いつてもいいが、どこかで読み手の直接的な反応を促すあまり、どうしても「言おう」としてしまう。つまり「何かを足す言葉」となり、意味性のより強まる方へと流れてはいないか？だからこそ、そうした流れへの反動として、現代短歌は佐太郎のこうした歌がいつもどこかで気になって仕方がないのではないか。

いつだったか、「心の花」全国大会のとき、佐佐木幸綱が「どうしても言いたい、言いたいよなあ…でもこれを取る勇気を、どうか持って欲しい」と話したときの、会場から湧いたため息とも呻吟ともつかぬ数多の声を私は忘れられない。